

## 1 小平市のあゆみ

## 原始から中世

鈴木遺跡の発掘により、小平には3万数千年前の旧石器時代に人が暮らしていたことが明らかになっています。また、八小遺跡の発掘により、古代(奈良平安時代)にも人が活動していた痕跡が確認されています。しかし、水の確保が難しい武蔵野台地に人が定住するのは困難で、小平に人が定住するためには、承応3(1654)年の玉川上水の開通を待たなければなりませんでした。

人は住んでいませんでしたが、小平の地は昔から交通の上では大切な場所で、古代には東山道武蔵路という所沢と府中を結ぶ主要な交通路が通っていたと考えられています。中世(鎌倉時代)になると鎌倉街道が通り、武士たちがこの道を通って戦いをくり広げました。江戸時代になって徳川家康が江戸に幕府を開くと、今までの南北の道に加えて東西の道がつけられます。青梅街道と五日市街道です。このように、この場所に人は住んでいなくとも、多くの人々がこれらの道を通って生活していました。

## 近世から近代

玉川上水が完成した2年後の明暦2(1656)年、小川九郎兵衛が玉川上水と野火止用水に挟まれた青梅街道沿いを新田開発し、小川村ができます。享保7(1722)年に八代将軍徳川吉宗が新田開発を奨励すると、それ以降、小平市域では小川新田、大沼田新田、野中新田と右衛門組、野中新田善左衛門組、鈴木新田、廻り田新田が一斉に開拓されていきました。

明治22(1889)年4月1日に市制・町村制の施行により、これら7つの村が合併され「小平村」となりました。村名は、小川が最初の開拓村落であることと、地形が平らであることからつけられたといわれています。

明治27(1894)年には川越鉄道(現・西武国分寺線)が開通し、小平に初めて小川駅ができました。さらに昭和2(1927)年に西武鉄道(現・西武新宿線)が、昭和3(1928)年には多摩湖鉄道(現・西武多摩湖線)が開通し、人の往来が容易になりました。

大正末期から学園都市を造る計画が進められ、女子英学塾(現・津田塾大学)や東京商科大学予科(現・一橋大学小平国際キャンパス)が移転してくるとともに、軍や国の施設も開設され、しだいに人口も増えていきました。

## 現代

昭和19(1944)年2月11日に町制が施行され、小平町が誕生しました。当時の人口は15,595人(昭和18年12月24日)でした。翌年の終戦以降、静かな農村だった小平も、都市化に向けて動き出していきます。住宅難の東京都心部に近かったため都営住宅が多く建てられ、大工場の誘致も進み、昭和35(1960)年に行われた国勢調査で小平町の人口は52,923人と報告されました。昭和37(1962)年10月1日、市制が施行され、全国で558番目、都内では11番目の市として小平市が誕生しました。当時の人口は70,634人(昭和37年1月1日)でした。

そして、平成24(2012)年に18万人超の市民と市制施行50周年を迎え、市制施行100周年に向けて歩みを進めています。

